茶経抄物　七之上

萬葉集巻第七

雑歌

詠天歌一首 柿本朝臣人麻呂

天 海 雲之波立 月船
あめのうみに くものなみたち つきのふね
星 林 隠去見
ほしのはやし かくれゆくみゆ

詠月歌十八首

作者未詳

常 者曽不念 物乎 此月之
つねにはさもたもぬ ものをこの つきの
遇 匿 惜
あへるかくれを あたらきよしも

夕 香聞
ゆふべかも きよくあるらむ

夫 之弓上 振 起 借高之
ますらをの ゆみはりたて おこしかたかの

野邊 副 清 照 月 オ可開
のへさへに きよくてる つきよりも

山 来尓 不知夜歴月乎 将出 香登
やまにこそ いさよふつきを いでむかと

待 作 居 尓夜首 降 雪類
まつとしをよし ふらくし

明日之夕 将照 月夜者今 四 尓
あすのよも てらんつきよは いまのごと

今夜 尓 因而夜長 有
こよひのごとし よにしてよなが

王 音之小簾之間通 獨居而
おほきみの こすのまとほし ひとりゐて

見験 無 暮月、夜鴨
みるしるなくに ゆふつくよかも

春日 山押而照有 此月者
かすがやま おしてるつきは このつきの

妹之庭 母 清 有 家里
いもがにはにも きよくありけり

1075 1076 1077 1078 1079 1080 1081 1082

霜雲ヘ 爲ナン 登高寄将有 久堅之

霜雲へ為ん登高寄将有久堅之

夜渡 月乃 不見人乎念者

夜渡る月の見ぬ人を念へば

山未尓 不知夜經 月乎 何時

山未だに知らず夜経る月を何時

吾待 将座 夜者深去作

吾待ち将座夜は深去くと

妹之當 吾袖 将振 木間従

妹が当吾が袖振らん木間従

由来 月尓 雲 莫棚引

由来月に雲なたなびき

苅薦之 乱出之 月乎 伴

苅薦の乱れ出づる月を伴

國将榮 常月者 照良思

国栄えむ常月は照らしこそ

右一首 大伴宿禰家持

右の一首は大伴宿禰家持

仙柘枝 類聚万葉三八七ノ二

仙柘枝此類聚万葉三八七ノ二

霜雲ヘ 爲ナン 登高寄将有 久堅之

霜雲へ為ん登高寄将有久堅之

夜渡 月乃 不見人乎念者

夜渡る月の見ぬ人を念へば

山未尓 不知夜經 月乎 何時

山未だに知らず夜経る月を何時

吾待 将座 夜者深去作

吾待ち将座夜は深去くと

妹之當 吾袖 将振 木間従

妹が当吾が袖振らん木間従

由来 月尓 雲 莫棚引

由来月に雲なたなびき

苅薦之 乱出之 月乎 伴

苅薦の乱れ出づる月を伴

國将榮 常月者 照良思

国栄えむ常月は照らしこそ

右一首 大伴宿禰家持

右の一首は大伴宿禰家持

仙柘枝 類聚万葉三八七ノ二

仙柘枝此類聚万葉三八七ノ二

ゆきくるものの 鞦ハ矢をつくる 服のれ

ゆきくるものの鞦ハ矢をつくる服のれ

也方ふたつ所と鞦負と

也方ふたつ所と鞦負と

ゆきくるものの 鞦ハ矢をつくる 服のれ

ゆきくるものの鞦ハ矢をつくる服のれ

也方ふたつ所と鞦負と

也方ふたつ所と鞦負と

鞦 懸 流伴 椎 廣 伎 大伴 介

鞦懸流伴椎廣伎大伴介

鞦 懸 流伴 椎 廣 伎 大伴 介

鞦懸流伴椎廣伎大伴介

國 将榮 常月者 照 良思

国将榮常月者照良思

國 将榮 常月者 照 良思

国将榮常月者照良思

ふたつもちわたす時 鞦を 十ふたつまで時も

ふたつもちわたす時鞦を十ふたつまで時も

ゆきくるものの 鞦ハ矢をつくる 服のれ

ゆきくるものの鞦ハ矢をつくる服のれ

也方ふたつ所と鞦負と

也方ふたつ所と鞦負と

鞦 懸 流伴 椎 廣 伎 大伴 介

鞦懸流伴椎廣伎大伴介

國 将榮 常月者 照 良思

国将榮常月者照良思

ふたつもちわたす時 鞦を 十ふたつまで時も

ふたつもちわたす時鞦を十ふたつまで時も

詠雲歌三首

詠雲歌三首

柿本朝臣人麻呂

柿本朝臣人麻呂

痛足 河 河浪 立 奴 巻 目 之

痛足河河浪立奴巻目之

痛足河河浪立奴巻目之

痛足河河浪立奴巻目之

1094　1093　1092　1091　1090　1089　1088

師河の弓槻か岳同所なれ
ハ河波立をもて雲立らし
と推量也又雨も降三
を云り　古来風体抄ノ毛井タツラシ二和
足引乃山河乃せの
なる音にハちるかうらふに
やまのあらしてて河瀬の
なると云り雨雲も
催すと心あるへし
おほうみの歌も
海原　童蒙抄なとあまれり
と和スル抄云清てあまれ
と波立雲立とよめり
まれりとハ白雲と言
むとてあるやとも仙
点うなりと和スル亡也

由槻我高仁雲居立有良志
ゆつきかたけに雲ゐたつらし

足引之山河之瀬之響苗尓
あしひきの山河のせのなるなへに
弓月高雲立渡
ゆつきかたけに雲たちわたる

伊勢従駕
大海尓嶋毛不在海原
おほうみにしまもあらなくにうなはらの
絶塔浪尓立有白雲
たゆたふなみにたてるしらくも

詠雨歌二首　作者未詳
吾妹子之赤裳裙之将染埿
わきもこかあかものすそのひちぬらん
今日之霡霂尓吾共所沾名
けふのこさめにわれとぬれなむ

わきもこか河のこさめの
ひちめしと云すそ代ぬらすへき
とあるへきあいなかなら
ちさいたらしくぬれと
あるへきあハなかなら
とし
あるみのとそまのみ
そふのまさしとて
む枕詞なる神の
をもり　拾遺集に入
みもろのやま山あと
三諸乃山つきと云と
こひハめしるをまくと
ハ枕なするを巻向
といへん枕詞かきつき
ていとハつきて於く

童蒙抄云是ハひちめんとてといへるにきんとてと
ぬすそ代ぬらすへきこさめに我さへぬれよとよめると

可融雨者莫零吾妹子之
とほるへき雨はなふりそわきもこか
形見之服吾下尓着有
かたみのころもわれしたにきたり

詠山歌七首　柿本朝臣人麻呂
動神之音耳聞巻向之
なるかみのおとのみきゝしまきもくの
檜原山乎今日見鶴鴨
ひはらの山をけふ見つるかも

三毛侶之其山奈美尓兒等手乎
みもろのやそのやまなみにこらかてを
巻向山者継之宜霜
まきもく山はつきのよろしも

我衣色服染酒
わかきぬの色とりそめむうまさけの

三室山 賦葉為在

作者未詳

三諸乃 就而 三輪山見者 隠久毛 口乃
名耳乎 始 瀬之 檜原 所念 鴨

昔者之事波 柔 手 我見 而毛
久 成奴 天 之 香具山

柿本朝臣人麻呂

巻向之痛足之川由往水之
絶事無又反将見
黒玉之夜去来者巻向之
川音高之毛荒是鴨瞼
川

作者未詳

天玉之御笠山之帯乎為流
細谷川之音之清也

今敷者見目屋跡念之三芳野之
大川余杼平今日見鶴鴨
馬並而三芳野河平欲見
打越来而曽瀧乎遊鶴
音聞目者未見吉野川
六田之與杼平今日見鶴鴨
河豆鳴清川原平今日見而者
何時可越来而見作偲食
泊瀬川白木綿花乎墮多藝都
瀬乎清きよけ跡見乎来之吾平
せをさやけく跡見まこと我を

ふるくはみつつまそ
ふつふるのこくもの
らんこと
はつせ川しらゆふ花に
畫所云白木綿花
のやうにおちたきつ
み瀬清跡とかけます
しゝを和ス

1108
泊瀬川 流 水尾之 湍平早 井堤越 浪之音之 清久
はつせ川ながるゝみをのせをはやみ（早みとやし）
ゐてこすなみのおとのさやけく

1109
佐檜乃熊 檜隈川之 湍平早 君之手取者 将縁言毳
さひのくまひのくま川のせをはやみ
きみかてとらはよらんといふかも

1110
湯種蒔 荒木之小田矣 求跡 足結出所沾 此水之湍尓
ゆたねまくあらきの小田をもとめんと
あゆひいて（あゆいいて）ぬれぬ此川のせに

はつせ川なかるゝを
みを尾は水の緒の條き也
檜隈井とあるをせきわけたる所をいふ
さひのくまひのくま川 佐檜乃熊檜乃熊ハ大和高市郡也 檜乃隈川ハ同
所をさねいふ 一説云檜隈乃末の所乃隠れたる所さハ獅守と君
のまへにハ彼平郡を渡るにひかされと云とも
ゆたねまきあらきの小田 あらきハ五百種とかきし
ゆくかれ小田ハ 玉東墾田也 あゆひハ足のまき日本

1111
紀十三ニ あゆひのあゆひの小鈴 又十四ニ 鈴金距 あゆひいてぬれぬ同意
古毛 如此聞作哉 偲兼 此古河之 清瀬之音矣
いにしへもかくききつゝやしのひけん
このふる川のきよきせのおとを
いにしへもかくききつゝや
ふる川 大和之古川と
よむ名に付て古の人も
此ふる川の清き瀬の
音をきゝてしのひけんと
こゝろにきこえてこそ

1112
波祢蘰 今為妹乎 浦若三 去来率去河之 音之清左
はねかつらいまするいもをうらわかみ
いざいざ川のおとのさやけさ
ひきめく
はねかつらいまする妹
はねかつら 神事にかける女のかざし
のこと乃 いさといさ川
又安云いさ河名也と云
玉東常陸のいさ河ハ

1113
此小川 白氣結 瀧至 八信井上尓 事上不為友
このを川きりそむすへる（白氣とも）たきちたる
はしりゐのうへにことあけせねとも（友とも）
花のゝ ほの見えしといふ心を序のやうにいひてはしりゐとさ
このを川 きりそむすへる 又安云きりむすふハ 霧むすふ也
はしりゐのうへ 玉東 此小河と八 閑の小河をさしていふ 走井と名付る也

ことあげとハ日本紀一に興言(コトアゲ)と出心をやらしていふ詞也むかしハ息出るを云又
日本紀に氣噴(イフキ)之狹霧(サギリ)ともあり一ハことあげせハこそ霧立ぬべきを
ことあげせねども走井のうへに川霧むすぶとよめりいとおもしろき歌也

1114
吾紐乎妹手以而結八川又還見萬代左右荷
わかひもをいもかてもちてゆふや川またかへりみんよろつよまてに

わかひもといもかてもちて
第一第二句ハ結八川
といはん序也仙覺ハ
八川五代集哥枕にも
肥後也とありこれ
河の名にあらねども

1115
妹之紐結八川内乎古之并人見等此乎誰知
いもかひもゆふやかうちをいにしへのみなひとみきとこゝをたれしる

いもかひもハゆふといふ河内
妹かひもハゆふといふ河の
枕詞也并ハみなとよめる

詠露歌一首　作者未詳

1116
烏玉之吾黒髪尓落名積天之露霜取者消乍
うはたまのわかくろかみにふりなつむあめのつゆしもとれはきえつゝ

うへ二句の心ハ里の繁
ふりなつむハ降積心
ある也あまの露霜
いふハ天の露霜也

詠花歌一首　作者未詳

1117
嶋廻為等礒尓見之花風吹而波者雖縁不取不止
しまみすといそにみしはな風ふきてなみはよるともとらすはやまし

しまみすと礒にみし
船すゝめめぐりするをとは
さりと云凡波ハよるとも
色は花をとらんとさ
いふしへはあやしん
わすらるゝハ我とく

詠葉歌二首　柿本朝臣人麻呂

1118
古尓有險人母如吾等架弥和乃檜原尓挿頭折兼
いにしへにありけん人もわかことかみわのひはらにかさしをりけん

みやこしみわの檜原と
をりさして我かざしに
心を推(ヲシ)て古人もか
くやとおもひやる心

1119
徃川之過去人之手不折者裏觸立三和之檜原者
ゆく川のすきにし人のたをらねはうらふれたてりみわのひはらハ

ゆく川のゆくといはん
河の逝てかへらぬこと
をいふ古人を云古人ハ
手折ねハ檜原も無立と
しなの哥乃我きくしか
ある心をとこひつゝや

詠蘿(コケヲ)歌一首　作者未詳

三芳野之青根峯席
みよしのの あをねのこけも
誰 持一織哉経緯無二
たれかもち ひとへそなきは
詠草歌一首 作者未詳
妹 竹等 我通路 細竹為酢す
いもが たけと わがかよひぢの ささ
我ゝ通 廉 細竹原
われかよひぢの ささはらの

詠鳥歌三首 作者未詳

八釈 山 際尓 渡 秋沙乃 往将屆
やまきはに わたる あきさのの ゆきてもとどけ
其河 瀬 尓浪立 勿湯目
そのかはの せに なみたつな ゆめ

河原尓 鳴智鳥
かはらには なくちどり
河津跡 忘 金都毛
かはづとも わすれ かねつも
佐保河尓 小驟 千鳥 夜 三更而
さほかはに をしに ちどり よ ふけて
音 聞 者 宿
こゑを きけば いねがてなるも

不難イなそ尓そ
思故郷歌二首

清 湍尓 千鳥 妻喚 山際ゆ
きよき せに ちどり つまよび やまきはゆ
霞 立良武 甘南乃 里
かすみ たつらむ かなのの さとに
年月毛 未経古ゆくさま 明日香 河
としつきも いまだへなくに あすかがは
湍瀬由 渡 無 石走
せせゆ わたる いはばしも

詠井歌二首　作者未詳

陳田寸津　走井水之清有者
おもひきや都乃水の清よ
千類衆万葉六いまこゝにさまとひかん

渡者吾去不勝戀可禰
わたりはやまされはやまとてぬるへし

安志姚成　榮之君之寧之井之
おもひきやすゝろに君乎
石井之水者雖飲不飽鴨
いそ井乃水者雖飲不飽鴨

詠和琴歌一首　作者未詳

琴取者嘆　先立盖毛
ことゝれいまけまさまくゝも
琴之下樋介嬬哉左夜更而
琴乃音乃
かなしくもあるかな

樋口ニ琴ノ胴ノ中ニ樋ヲ仰テ入レテ下樋トヨメルナリ

芳野作歌五首　作者未詳

神光振　磐根已凝敷　三芳野之
神さひにけり

水分山乎見者悲毛
みくまりの山を見れはかなしも

皆人之戀　三吉野今日見者
諾毛戀来
うへもこひけり

山川清見
夢乃和太事　西在来寤毛
ゆめのわたことせにありこそ

見而来物乎念毛
見てこしものをおもひつゝ

皇祖神之仙境乎
すめろきの神の仙境を

タイ冬暑蔦葛仙ナラウ
人ひとゆゑに

弥常敷 介 吾 友 将見
いやとこしきさかわまさんと
能野川 石迹柏 筆の時 齒成ゐまる
よろづよまでにとことはにおす
吾者 通 萬 世尤右 二
わをとをかよろづよまでに小
皇祖神 類聚 和す
すめろきの神の命と和す仙覚はすめろきのと和ス
久皆類聚古今和歌集には
すめろぎの神の命とあるによりて天照太神の御事ともよみなせるなり
かうにすべ神事れば神は不要乃ゆかれいやとこしきの祀
せいやとこしきにはよくこしきいよとこしきは吉野宮を常しき所といふ
ことの詞にて神社物云にそと柏とは宮ゐ生する柏に柏は学
盤木なりそくやよろづよまで或人名を柏とつけたるもさる
ことせとそも柏とひれは此名所論語云松柏後凋といふ事
ありて柏は松と同じさこそきこゆとあれ乃宮ゐ生する勿論
あるべし見安いぞと柏乃ことにつけてとそ吾友共の目ときをなすと

とそ柏のときいふもやうやうの心有ていにしへ及そてかはりての
川に通りてうたんとこ
うち川ゆくせなりし
山城乃宮滝川もとも此
あるんとこと乙安云乃也
乃人は細代をと玉束よ
こも此にくまれいか
ちわるかよりて細代
もれ舟よりおもの此
狩男ありきこゆと
うち川うち川
仙旨玄蕃小松
るは蓬人のそ柏を
るこ狩男ありてうたん
と也

山背作歌五首

作者未詳

氏河歯與打湍無之 阿自呂人
うちひとしいせおるへ乃ひと
舟呂音 越乞 所聞
みねふこえいをちこひさこや
氏河介生 菅藻乎 河早
うち川うちるすもとり川早乎み
不依 來介家里 巢 為益 綿
らてきるかりとかやと
氏人之聲 乃足白 吾 在者
宇治人乃こえ乃たえぬるをわれをいまし
今者 王良 増 木積 不來 交
いまし玉良増木積不来交
氏河乎 船 金渡 呼跡 雖喚
うち川を舟もとせよとよへと

（不所聞 有之 楫 音 毛 不馬）

さこてしはくしもしもせしも

（千早 人 武川 限手 清 可毛）

ちもや人うちいもみをきよみし

（株 去 人 之立 難 為）

ありまれ人なれ ひとのこそいかすれ

つまりまう雨まく

可人とよやまこと名をこうみこすこといおつやりまするこりめ也

うちへめくこと乃可ろこい 細代 うりかすま物も放よ称方りまと

めも 業仙花と乃安こりろ乃ろくほうこれりかおこう華竟い同さ兵

うち川を舟わくせよし機音しせすこい波毎のまる考もせねこの空

ちをや人うち川宿へ ちをや人い宇治乃松う也 集土まも ちをや人

うちろわくおれ平き附りこおると 仙覚抄をうちこいんとめの泥行う

ちりや人ことくうちをや人こい名をるき人い寺の心い宇治にうれのいさ

きよくこく飽くこれい旅やく人もそよまて立くくす

こもよりもとと仮乃詞林采択云路平人行出もくてくる詞也

見安も同く 業山請抄の仮名ちやり上客乃泊とかくてくる

まくにおう舞乃ほくこくる人れもとと口訣おおく

橘津作歌 二十一首

（ツクミテ）

橘津作歌 いのまりく

（不のうく）

こちのこうりかるの野と

八千物云こちのうり

白猪ご云能因抗侯

云雑鬼矣皇かる野

ゆく路このくるかく

枝のあうりくれいこる

くうりかるといいうち

神中物云今業こちのうりかるといふ乃名かるいこうれいこいてそ

るるくいふいふのるく右くうやくるこるこる乃名の中かいふれ

れしるこ得まれいふいあやこいりすかくくのくせまこ

人乃いりくうくやくの乃ふさてのみこう作れ業こちのうりぬ

ふ乃説字名物奥俊物縁語物童菱物乃抗くま未決只枝名れ松

汗るとと神中物れ説てなれ哥乃恋い枝列乃業よ枝名師を行れいとる山

寺立河りくを作れてくるく者いおきさ句新業今ふいるのをゆこ

むこ(婿)のりあ(有)をそ(麁)ら
りく(陸)弱音馬也りくい
おほ(大)そしあをそく
さ色くあまれいあ
まれあそくのり
そそきに(尼)沽ーに
いのちさち久きれ
命と幸こ久きる人
りいなきこもいかま
もそろくーるへ
いかむはほと神中おろ松はと楊磨との場りーるチと云
あると省なりえていそぬろあるる故か魚水と云ふ明神と
いふ神、おりすけいろのりろのうよいちりま出いろそく魚水と云
栗名所ふーるみをのチく恨りく命幸久きさ故かのるーるとと
さとふけくりり石松浦ちーる舟乃松はほ江をこきさをも
おはのほ乃作あ日本紀十仁徳十一年冬十月堀二宮北之郊原一ヨリ南水一

武庫河 水尾急 嘉赤駒
むこ(婿)りあをそ(麁)やなのこのまれ
足何久激 沽 郁流鴨
おりくそきまぬるりるる
命 幸久 吉 石ノ流
いのちさ比久きやこもいそそく
魚水 水平 結 飲都
ーるチりあをむすりるーるのる
佐夜深 而 穿 江水手鳴 松浦舩
さとふけくりり石松浦舟
焼音 高之 水尾 早見 鴨
りちをこりるをそやこる

以入西海因以号其水曰堀江一祇曰我舟乃梶の音をゆてくとのまきとこふ
くやきてくもみら
墨江乃名古ふ
ちくいりれぬ
ちりるくー
ーるりよめ貝を拾ふと
ちぬ乃海人やねろ
はほ妹ふーぜんこそ
貝拾ひく神沽ーと
めつーさんとわま
希客者と云て日
本紀神代下ニメツシ
キヒトとよめり才一
才二の名ハ住吉を
ろん汎迫めつし人
と我家ふするを妻ーとりいみりそ住吉の出屋の黄土乃義家と凡

悔 毛 滿 奴流 鹽 鹿墨江之
くやきてくもみら
墨江乃名古ふ
ちくいりれぬ
ちりるくー
ーるりよめ貝を拾ふと
ちぬ乃海人やねろ
はほ妹ふーぜんこそ
貝拾ひく神沽ーと
めつーさんとわま
希客者と云て日
本紀神代下ニメツシ
キヒトとよめり才一
才二の名ハ住吉を
ろん汎迫めつし人
と我家ふするを妻ーとりいみりそ住吉の出屋の黄土乃義家と凡

岸乃浦廻従行益物平
為妹 具 平 拾 等陳奴乃海介
いとまぬのいろひよりん住の比
野沽之 柚者 雖涼常 不ン干
ぬるる神いでもかそす
目頬 数 人平 吾ハ家 住吉すみよし之
めたまきこんをわまくよすみのての
岸乃黄土うち将見 因 毛 欲、得
服 有者拾 尓 将往 住吉之
いとまぬのいろひよりん住の比
岸 因 亡 戀 忘 具
ましふるてー

馬雙而今日吾見鶴仕吉之
むまなめてしくもわのこつるすみの江の
岸之黄土つち於萬世見
まくもほしよろづよにかくしこそみ
仕吉介往ゆく古ゆ道介昨日見之
すみの江のよくとしみちかきのこと
戀志具事二四有家望
こひまくしけれこのころおもほわ
墨吉之岸介家欲得奥介邊介
ふみの江の岸よ家もくま沖よへな
縁白浪見下將レ思
らすまさてこひこふらん
大伴之三津之濱邊平打曝
おほともの三津の濱邊をうちなびき
因來浪之迹方不知毛
よせくるなみのゆくへもしらも

梶之音曽聞方鄰爲鳴海未通女
かちの音そきこゆるなるのうみのつゆめ
舊去者梶之音爲奈利
一云ふるさとはかちのをとすなり
藻苅介舟出爲等思母
おきへこぐふねのかちよもきこえすしも
仕吉之名兒之濱邊介馬立而
すみの江のあこの濱邊にむまたてて
玉拾之久常不一所志
たまひろひつねとところをしめすらし
雨者零借廬者作何暇介
あまはふるかりほはつくるいつのまに
吾兒之鹽干介玉者將拾
あこの鹽干にたまはひろはん
奈呉乃海之朝開之奈凝今日毛鴨
なごの海の朝明のなこりけふもかも
磯之浦廻介乱而將看有
いそのうらみにみだれてをらん
仕吉之遠里小野之真榛以
すみの江の遠里小野の真榛もて

須礼流衣乃盛過去
時風吹麻久不知阿古の胡の海之
朝明之塩尓玉藻刈奈
吉之奥津白浪風吹者
来依留濱平見者清霜
住吉之岸之松根打曝
縁来浪之音之清羅
難波方塩干冊立而見渡者
淡路嶋尓多豆渡所見

万七ノ十五

へきものゝとうへはのおもうゑ勿海し但物はゝもゝのことゝ
すゑのゑれ中はゝ日は
もゝのえのゑのねの
おふかうこゝろそ
右三首心明
へさうりーもの
いへさうりハねをそれ
さそらの史秋風を
多屋より人悲怨秋
もとつゝれみすの
国方風土記ニ播ハ作
物紀伊ニ志ハ不出
すうりハ何ホ有
やへホ近ホ無ホ
ものゝうりうこゝろ
鮎市知多八千紀伊

羈旅作哥 九十首

作者未詳

離家旅西在者秋風
へさうりーもの
寒暮冊雁喧渡
さしきゆへうりやもあるさわる
園方之滝鳥浪立巴
妻喚立而遶近著毛
ほよよいーそへよちうたくも
年魚市方塩干家良思知多乃浦尓
おゆちうたうしちうたのほよ
朝榜冊毛奥尓依所見
うさこゝろおねおきよるもう
塩干者共ニ溜尓出鳴鶴
きうたうしまゝ出くるくるもの

音遠放 礒廻 爲良霜
をとをさかる いそまわす
暮名寸介求食爲鶴鹽滿者
奥浪高三巳妻喚
おきつ浪高三巳妻喚
古介有監人之覓作
いへなる妹を人のとめてく
衣卅搗卑真野之檜原
きぬすりくんやまの
朝入爲等礒介吾見之莫告藻刈
あさりすと いそわらふなのかる
誰嶋之白水郎可狩刈
たれしまの白水郎可狩刈
今日毛可舟奥津玉藻者白浪之
けふもしおきつ玉藻者白浪乃
八重折之於舟乱而将宿
やへおりうへに舟しきみだれて
近江之海湖者八十何介加
あふみの海みなとやちとこ

君之舟泊草結兼
きみのふねとめくさむすび
佐尼浪乃連庫山介雲居者
さねなみの連庫山介雲居者
雨曽雫智否友来吾背
あまそそぎちかとともきまし
大御舟竟而佐守布高嶋之
おほみふねをてさもりふたかしまの
三尾勝野之奈伎左右思所念
みおかつのなきさうしおもほゆる
何處可舟乗為家牟高嶋之
いつくにかふねのりせむたかしまの
香取乃浦従已漕出来船
かとりの浦ゆこぎいてくる舟
逸太人之真木流云布乃河
はやひとの まきなかすてふ
事者雖通船肖不通
ことはかよへど ふねはかよはず
霰零鹿嶋之埼乎浪高
あられふる鹿嶋の崎を波高

過 而夜 將行 戀 敷物乎
すきくやかん亦 さおと
足柄乃 菅根飛超 行 鶴乃
なくのをこねそいねらえの
之 見 者 日本 之所念
とゝもさこれはやもとゝもに
夏麻 引 海 上 漕乃奥津渕尓
おけるひくうちあるしの沖しすよ
鳥 者 贄竹 跡 君者音文 不為
うちはすけと君はきもせす

万七ノ 十七

若狭 在 三方 之海 之濱清 美
わかさなる みかの海 濱はきよみ
伊往變 良比 跡不飽 可開
いゆきかへらひ見れとあかぬかねつ
卯南野者 往 過 奴良之 天傳
うなの者 行 過 奴良之 天傳
日笠 浦 波立 見
ひかさの浦に波立そ見ゆ

思賀麻江者 許藝須疑奴良思
一云 こかまえは こきすきぬらし
家尓之盛 吾者将戀 名可 南野乃
いへにしあれは こひんなかも 南野の
凌茅之上 尓照 之月夜 平
しのさちのうへに てる月夜 を
荒礒超 浪平恐 見 淡路島
あらいそこす 浪を かも 見 淡路島

1181 1182 1183 1184 1185 1186 1187

不見 哉 将遥 幾許 近 平
又すべもやすきんこころを
朝霞 不正 軽引 龍田山
いさりするみやこびとやまとへに
船 出将為 日者 吾 将恋 香聞
みをそでんわれこいんしも
海人小船 帆轟 張 流見 左右荷
あまのをぶねほのぼのとこぎでよる
鞆之浦廻二浪立有所見
とものうらにしほみちくれば
妹去而 示還 見六 大夫乃
いもがいへをばかへりみつつ
手二巻 持在 鞆之浦廻平
たまもかるともしきこのうらを
鳥自物 海二浮居 而奥津浪
とりじもの うみにうきゐて おきつなみ
騒平 聞 者 数 悲 喪
さわくをきけばかなしかりけり

万七ノ六

1187 1186 1185

やすみしし わご大君の 鞆の浦に 舟泊てすれば
こもりくの 泊瀬小国に よばひせす 我が天皇の
(カンジモノ) 奴かも 神の命の 敷きいます 国のことごと
舟じもの 浮きてあるらむ 一云 浮きてあるごと
大和の 青垣山の 隠れ行く 雲にしあれば
天つ水 仰ぎて待つに 夜も昼も 来ませわご大君
朝凪に 来寸二 真楫 櫂 出而見 作来之
御食つ国 志摩の海人ら 朝なぎに 楫櫂動し
夕なぎに 真梶繁貫 三津乃松原 浪 越似 所見
いさりする 見のともしさ 大御食に 仕へまつると
朝入 為流 海未通女等之袖
あさりする 白妙の袖 通
沾 西 衣 雖干 跡 不乾 有
ぬれてかわくへもなし
柿本朝臣人麻呂

網引 為 海子 哉 見 飽 浦
清 荒 磯 見 来 吾
あびきする あまのをとめの
きよきいそみるにきたるかも 吾

作者未詳

山超而遠津之濱之石管自
山こえてとをつの濱九
まはの濱八
近吾来
含而有待
わつまてとをつの里
大海介荒拆莫吹四長鳥
おきつみよのなきさもとまりの
居名之潮介泊古とる尤右
みまの乃みなとよ舟そとまる

おきつみよのなきさもとまりの
泊そも類神当こゝろよりも古点をとる
こゝ八宮おはのまこゝ神中村云二条院許可或人湖上月とよみ
そうみとよめりをとる堂乃哥仙をとこゝろめ
何也湖をうみ万葉かゝる乃湖とよめりこゝ
舟盡
舟そてこゝろ
可志振立而廬利為
舟をとるとをかし
名子江乃濱邊過不勝鳥
あこ江乃まこゝろ

かちと云古点をとる
舟つゝくとをかしからす
揖をとに拙くそ
江乃濱八宮おはの三なこの
濱と同哥なこゝ哥心
ハ濱の哥をとる
す舟泊てとをする
いそしの門いそのゝ
出入河見安云名所也
未勘こゝ蛛の門ハ出入
いそん汎説なるの
こゝにはまきれまつひ
家をこゝろとをり
枕をとをかしからす
白きかゝ赤子乃母

妹門出入乃河之瀬速見
いもりかといそいそ乃河の瀬をとをや
吾馬飛家戀良下
わつるをとをかしからす家こゝろ
自桙介保布信土之山川介
吾馬難家戀良下
わつるをとをかしからす
敷能山介向妹之山
世乃山よりとをむかふ
事聽屋毛打橋渡
こゝろみやもうちそわたす
妹介戀余越去者敷能山之
いもこひわたりてゆけハ世乃やまの
妹介不戀有之尤
妹こゝろなきとをり
人在者母之最愛子曽麻毛吉
人とをしハおやのまなこそ
木川邊之妹與背之山
まれのそつゝいもとせ

（欠）土といえんとして詩る紀人まれち山ハ大和紀伊下総ともの心おか同
世乃山りてふむ（妹背ハ歌くりこまかふ也）るハ背きくちるを
ゑてふまうけすもんうう格わ（せ）ともすれ格いうち国の格ゑ安云
ことゆるもこいこうけすることりくばあの次ふく本ふ奥のあるもりり
いこにこれれてゆハ紀伊乃格ふ古つの姉を立てゆハ背乃山乃さ
きくゆりまる気ゑもきくてゆりもの名きくさいまますくへ（ニテ）満やむん
人ありハおやかまるこう（妹背山乃まもくまをゑ（も）人まハ歌乃愛子まもん
りくまでくて狭ゑと 吾妹子尓吾戀行者之雲
わまもこまわりこいゆハことをくく 並居鴨妹與勢能山
妹ふこいおくてゆハ
こゆあふりこ月名 妹當今曽吾行目耳谷
きくもりてやむやて
ともこう
ことりのりもう今うわりゆくめまたこと 吾耳見乞事不向侶
わまうてくてこうことすもも
格行の人ゑひし女の実 足代過而絲鹿乃山之櫻花
名をけるそよめる歌 のまうるていうりの山代さくくいる

今ひとめ足まれきさ
心切りくこ
のりるこくいうの山代
八雲物足代渓伊勢ニ
系鹿山紀伊ニ
あくさゆこうふ
名草山八雲物紀伊ニ
名ハ雀むれて昊ふ
名別ふりくをくこ
のしゆくをすての
安太部ハ安太氏人く部
ハ伴乃部なる（ヤツカベ）歌ニ日
本紀三作梁取魚者ヲ
阿太養鵜等（カヒ）始祖也
ここをすての山ハ紀伊の
名ニ安太部ふの取魚（スナトリ）

不一散 在南 還來 万代
ちすもりのちんくりくるまて
名草山事西在 吾戀
あるさ山ここふ あまとりりわりる
千重一重 名草目名國
ちへりひこともあくさめる
安太部去小為手乃山之真木葉毛
のこをすての山乃まこのそも
久 不見者蘿生 尓家里
ひこくこねこけりなりり
玉津嶋能見而伊座 青丹吉
平城有人之待問者如何
あるひこりまちこくこる
鹽蒲者如何將為跡香方便海之
ふかせんとふりわこれ
神我手渡海部未通女等
なかりてわるおまをとめ
玉津島見之善雲吾無
ふこよくくし我いは

京 独而戀慕思者
やどこよゆきてこそゆくへなりけれ

藤原卿

黒牛乃海紅掬絰百磯城乃
大宮人四朝入為良霜
おきてやひとりあさりすらむ

若浦尓白浪立而奥風
わかのうらにしらなみたちておきつかぜ
寒暮者山跡之所念
さむきゆふへはやまとそおもふ

為妹玉手拾跡未國之
いもかためたまてをひりとまたくにの
湯等乃二埼二此日鞆四通
ゆらのふさきにこのひともゝ

見安云上臈女房赤き袴きて舟に立つるを誘ふ
やすみしゝわかおほきみのあそばしし舟立つるをみむ
被皆指物の名ある武士どもあまた乗りつゞきたる

吾亦乃檜者莫引
わかやどのひのきはなひきそ
戀来之心
こひくるこゝろ

未飽
いまあかなくに

九二

白山跡
玉津嶋維見
たまつしまこれみ

不飽何為而
あかなくにいかてか

袁
持去不見人之為
もちてゆきてもみぬ人のため

木國之挟日鹿乃浦尓出見者
きのくにのさひかのうらにいてゝみれは

海人之燎次浪間從所見
あまのたくひつなみまゆりかくれゆく

麻衣着者夏樫木國之
あさころもきれはなつかしきのくに

妹背之山二麻蒔吾妹
いもせのやまにをうへわきも

欲得裏盤乞者令取
ほしかりつゝもとらせてんいふ

作者未詳出古歌集拾

吾平沽　莫　奥津白浪

わすらをぬすなおまつ土ものく
手取之　栖二忘　跡　磯人之曰師
ものかこ乃ものこ
戀　忘　呉　言　二師　有　来
こいもわすれくひことみ　あひくる
来食　為跡磯二住　鶴　暁去者
うさもすもし磯なすむこひけゆけ
濱風　寒　弥自　妻　喚毛
なすりやさしみものをはふし
藻苅　舟　奥榜　来良之　嶋
もかねおきこさそ　妹之土ま
形見之　浦尓鶴　翔　所見
吾舟者　従奥　莫離おくれ　向舟
わかものおきこさそ　舟
片待　香光　従浦榜　拘會
こもりくそ　浦なこきこおりん
大海之　水底豊三　立浪之
おきうねのこもりこと
将休　思有磯之　清九
自荒磯　毛　益而思　哉玉之浦
離　小嶋　夢　石見
なれこれ夢見
磯　上尓　木折焼　為汝等
吾潜　来之　奥津白玉
濱清美　磯尓　吾居者見者

凡来云釣舟之人本
心磯のみ不見来之住
居ところ渚こぬ沖
乃方をとつきてとと
そやのきよみ磯のわら
はき為景をめつる心
おきつ梶音いく
尺安云ふ舟の舟
かぢ 梶音かぢ
いやてわかよりも
くする故里乃境を
くおきつ
おきつ波 つとも磯辺乃藻
はい所望し沖波乃磯の藻をまくらとするやとこ一云
うらとやしこき 章菱抄云なとも可入歟

白水郎 可将見 釣
舟之 不為 尓
奥津 槻 漸 志夫 手欲見
吾 為 里 乃 隠 久 惜毛
奥津 波部都藻 纏 持 依 来 十方
奥津 浪 邊波布 数 縁 来登毛
一云おきつ波 浪 立 くよりくる
君 尓 益 有 玉将縁 八方
栗 嶋尓許 袂渡 等思 鞆
赤石 門浪 未 依和来
おきつ
風毛吹額 浪 不立 而
大葉山 霞 蔡 棚引 佐夜深 而
吾 舩 将泊 高嶋 停 不知 文
狭夜 深 而 夜中乃方 尓 欝 之苦
呼之 舟 人 泊 瀬 鹿 鴨
神 前 荒石 毛 不見 浪 立 奴
従二何処一 将行 與奇 道 者無 荷

綿之底 奥 已具 舟 手於邊 将泊

いそにたちおきへを
海士乃こぎ出て舟出
すなはち鴨の飛とし
かざはやハみほの浦
八雲抄云かざはやの浦
みほの浦也 すまうら
わがふねハあかしのみなと
おきへさかるな沖の方へ
舟遠くするな浦に
ごとりんとて類聚万
葉六にもそうる形
ご和スに此浦にとまりつけ
見えてそもそも
されどのよし

1227 礒立 奥邊乎見者 海藻苅舟 海人榜出良之 鴨翔所見

いそにたちおきへをみれバめかりふね あまこぎいづらし かもかけるみゆ

1228 風早之 三穂乃浦廻乎 榜舟之 船人動 浪立良下

かざはやのみほのうらわをこぐふねの ふな人さわぐ波たつらしも

1229 吾舟者 明且石之潮尓 榜泊 奥方莫放 夜深去來

わがふねハあかしのうらにこぎとめん おきへなさかり さよふけにけり

1230 千磐破 金之三埼乎 過鞆 吾者不忘 壮鹿之須賣神

ちはやぶるかねのみさきをすぐれども われハわすれじ しかのすめかみ

ちはやぶるかねの 八雲抄金乃浦荒筑前也 見安云志賀乃すめ神
ハ筑紫乃鹿島也 豊葉すめ神ハ皇神也 志賀乃明神を云之

ちはやぶる神のみさきは波あらくて志賀乃すめ
神をいのりてハいかにも祝日我ハ忘れずといふ詞也そ
忘れまじと云ことなり

かぜのあひ日かた
童蒙抄云日かたとハ
ひがしの風の吹を云也
八雲抄云日かたとハひつじ
さる後那巽風也
東南說ある由
乃罷比湊 八雲抄にハ
近江とあり 仙覚抄筑前
風土記云鵠舸縣之東側有大江口名曰鵠舸水門
門くきとハ入る所
也あの入る所なれば
みづくきと云玉葉にも載

1231 天霧相 日方吹羅之 水茎之 岡水門尓 波立渡

あまぎりあひ ひかたふくらし みづぐきの をかのみなとに 波たちわたる

1232 大海之 波者畏 然有十方 神乎齋禮而 船出為者如何

おほうみの波はかしこし しかれども 神をいはひて ふなでせばいかに

1233 未通女等之 織機上乎 真櫛用 掻上栲島 波間従所見

をとめらが おるはたのうへを まくしもて かかげたくしま 波間よりみゆ

1234 鹽早三 礒迴荷居者 入潮為 海人鳥屋見濫 多比由久和礼乎

しほはやみ いそわにをれば あさりする あまとや見らん たびゆくわれを

鑒せるやいとむつかしく、神をしもけくと、神をる向ふる
舟乃るよる向しのるるを土佐日記乃るとれ変利の神よる向
するぬまれをひ色よるく吹るんとる
をとめるくをるるるの 拷嶋 和名小出雲潟根郡之ゝし 孝保三年ナ
一月源経神朝臣出雲名所哥合よ通員人されねわく立ふる
乃あれもるおいしねるかいとるめか女乃機をるふちまわふ奏を
よく吋系の加しも楫をくきすり 拷ふちしするるまれ拷鴻
といる人訓ふり与るりかけくきもけるけち
志わるやしいうる、潮平く船あ与うさた我よれいかつまれあるよや
人々るしんとさ
るノるしっふかちれ 浪高之奈何桃取水鳥之
祇回いふ桃取とい水主 浮宿也應ゝ為猶哉可榜
をよるて云通し水多の うもねやすゝ中し狩やうくゝやし
ほねとい枕辺心重 要耳継而所見小竹嶋之
きねい海上よ船ノる ゆめよのくけまさて己れいさく志れ

越後 波之數布 「平念」
いうこすは乃志くく おもふいゆ
静 毋岸 者波者縁家留者
志川りるもまふい波そちるくるる
此屋通 開作居者
ぱ屋どや。よまて居るれい
竹嶋乃阿戸白波者動 友
吾家思 五百入 釼洙
れいへおも梅いるりかるみ
大海之磯本由須理立波之
おるみ乃いるしいすわーる波の
将依 念有濱之浄ぎよ奚久
るんと、おるるをれさやるく
珠匣 見諸もろ山矣行之鹿come
まくけみるるとやまをいきーハ
面白 皿手古昔 「平念」
おるろくる志くもるおるゆ
黒毛之女髪山平朝越而
うしるれるろし山をあさこるく

山下露亦沾来鴨

やよ主こゝに露よぬれてくるるらし
足引之山行暮れて宿階者
妹立待而宿将借鴨
いもこゝにまちてやとらさんくるし
親渡者近里廻平田本欲
こわたせはちりさ里わをこゝとをち
今衣吾来礼巾振之野亦
いまきわれれひをふりの野よ

辺さ里のこをこゝとをちてやくく我今まてこ
をとめ〳〵みりわけ子をゆふ乃山
未通女等之放髪乎木綿山
雲莫蒙うい〳〵乃けうん
四可能白水郎乃釣船之綱不堪
情念而出而来家里
之加乃白水郎之焼鹽烟風平疾
立者不上山余輕引
ちはのりてやたにくひく

柳本朝臣人麻呂

天地道少御神作けるかも
妹勢能山見るれはー吉
せの山もまさるへしよも

おそるおそる天神 童蒙抄云大応道小御神ト云リ山神乃依カニ
よまつる山と又てらりぬ山 ぬれ名を奥儀抄云先ハ神ナリの名ニ大
已貴神ハすさの男ミ少彦名神ハ高皇産霊尊乃子也心を
一乃ぬしてと云ふ今ハ百姓今ハ百姓を助る故ニよりて御名
わすれもこりえぬ 吾妹子見偲奥藻
おもふりと八神乃藻 花開在我告與
也妹狭又て要ん我 君為浮沼池菱採
も告よりてえんとし 我漁神ノ沼ノ沼在蔵
ま子りめうさねの地 味為菅實珠瀕行吾
八尋殿云うさねの地 山路惑此日暮
みえんとこと童菱抄
云いしとハ採
菱乃事とハ
ひかり玉藻 五ニて之詩
猶くめすりのこ
類聚万葉三ハ各の
ごとし

問答

うつゝとハ何心ぞ
問答 八雲抄云問答ハ
多くハ二首也問ふ
と答ふるとハ一ハ問
二ハ答ふ
さゝ川のよるくるる
かりねを志のいほの原
いほりさきおられて
人の家ゐしてうらいこの
ほどを堪忍してハ
のちのちりうんとする
り同心
人こゝろハなりぬ
人こゝろハおかしろう
ものうちや我ハ
そこく堪忍するハ

詠鳥歌二首 以下出古歌集

作者未詳

依網河介鴨成智鳥何師鴨
さゝ川のよるくるるちどりうたゝねし
川原平思妍比盬河上
かうるを志のいやうるの
入社者意保尓毛言目我幾許
ひとこゝろおもふらめやも
師努布川原平標結
志のおくるを志ゆめ
詠白水郎歌二首

作者未詳

神樂浪之思我津乃白水郎者吾無二
しるみ乃うちのいのちを
潜者莫為浪雖一不立
いさりハすとも

大船尓槻之母有奈牟君無尓
おほふねのつきのははにあらなむきみなしにわれはいかにかもせむ

潜為八方波雖不起
かづきせはやかたなみはたたずとも

臨時作歌十二首

作者未詳

月草尓衣曽深流君之為
つきくさのころもぞこきながるきみがため

絲色尓染而
いとのいろにそめて

将摺跡念妹
すらむとおもへいもが

春霞井上従立渡
はるかすゐのへゆたちわたる

井上尓標結而
ゐのへにしめゆひて

君尓将相登他回来毛
きみにあはむとよそまはりくも

道邊之草深由利乃花咲尓
みちのへのくさふかゆりのはなさくに

咲而之後二妻常可云也
さきてしのちにつまとかいはむや

黙然有不有事之名種尓云手
もだもあらずありこしことのなだちにいひて

間知良久波少可有来
まもしらくはすくなからまく

佐伯山子花以之哀我
さへきやまこのはなをもちてあはれわが

子鴈取而者花散鞆
こがかりてはなちらすとも

不時衣服欲香
ときならずころもほしかも

斑衣服針原時二不有鞆
まだらごろもはりはらのときにあらなくに

山高深民若葉之三笠乃
やまたかみたみわかばのみかさのやま

ふ諸利乃家ニも此家をなをかしとかけても古点ニてや家をとあるを
行しやてふ行しとのまくらことはしと同しことをたとれ
やうふハいひまくれハさてふハ古しとすれともくさみ口すきみてよ
いつのとよく我下心をきてある人ハすくなしとそ
さへき山うの花りとし　さへき山ハ八雲なとニはのまこと卯花する
しとて卯花をとらくれいをさしたるをしとりてハとハ子ハ女
をえり此山乃卯花を持くこと人をなほさてハ花ハ家なき好と
こころあるねやしき衣　斑衣とハ斑衾と同く彩する衣をそへてそく
萩乃花すり衣すゝの心ろやきさりしハまへまたきこゆと袖中抄
云それ原ハ萩原之　又安同　又云榛原なりしこきゝと衣とハそ
衣そくさりしつゝも萩原乃花の時ありねそもえ時ありね斑衣ハまて
やそのしとと追考此巻の譬喩歌にも今造斑衣服とよてよけて
すなる衣と読るそし此ゑも花
すり衣と知へし
類聚ニモ此紀和とイ本

1261 山守之 里邊通 山道曽 茂成來 忘來下
山もりのさとへかよひし山みちそしけくなりけるわすれけらしも

六さとへつるよるも点ス
峯限く成れハ山の中にも
里小偏ニふるこらんとこ
行ひきの山つはき咲
又安云椿乃咲八峯哉
てしやつおの椿こよ
めり祝ひ者とハ狩人
乃照狩する二六深山又
とて祝ひるとする
やうに君かおもんとい
りお故ハ祝ひ者とこさ
あかつきと夜烏
暁乃山景乃まつけ
きのしきなり
此乃市ニ只独せて
めならへすハ独スる

1262 足病之 山海石榴開 八峯越 鹿待君之 伊波比嬬可聞
あしひきの山つはきさくやつをこえしゝまつ君かいはひつまかも

1263 暁跡 夜烏雖鳴 此山上之（此山上イ之れ之） 木末之於者 未静之
あかつきとよからすなけとこのをかのこすゑのうへハいまたしつけし

1264 西市尓 但獨出而 眼不並 買師絹之 商自許里鴨
にしのいちにたゝひとりいてゝめならへすかひしきぬのあきしこりかも

1265 今年去 新嶋守之 麻衣 肩乃間乱者 許誰取見
ことしゆくにひさきもりのあさころもかたのまよひハたれかとりみん

1266 大舟乎 荒海尓榜出 八船多氣 吾見之兒等之 目見者知之母
おほふねをあるミにこきいてやふねたけわかみしこらかまみハしるしも

以上行きしこアりひとしハ高ひよこアりくりとこし足安き魚あき絹ともし
てこれよりと云心し万葉西京乃市よ独出く人ありて見せ合
せり独見てこひよりしきぬれよりもねし高ふこアりこし助字
こゝらしゆくふなきまる此等類聚万葉ふかもしふねきまよりとみし童蒙抄
云ふなきまよりといひけりたふきこ鳴るとふし叫ぶのまゝひ足安云衣
乃切れやあるへし童蒙抄ありハ肩乃ちらひハ同ゆひと云すり
ここ見安一説あるや或本りハふなきまよりとこし鳴るとひきとおりハか
羌別のさき防人（サキモリ）と云なりこれも穢りゆくかせ此集乃末ふ多活
おみかねをいへるよここまつて行るみハ芸海と云見安云やかといへるこゑ
おほくの舟をいへ（イネヒ）し万葉用ス八足同とおなし海上よりいふまふひく舟中ふもか
クアス一女ハ見め掲要りこし
就所發思　標ず名ふ
篇をふよ活し多之
或本ニ八此下より旋頭
歌とあるハ定おなし
旋頭哥ハ卅一字ふ今一句

1267

就（ツイテ）所（ニ）發（ヲコス）思（ヲ）歌三首

作者未詳

百師木乃　大宮人之　踏跡所
奥浪　來不依有勢婆　不失有麻思乎

もゝしきの大宮人のふみしところ
おきつなみきよらすありせはうせさらましを

とするや普通乃哥ハ五句是ハ六句之初五七五ハあつくの哥れ短
哥と似すなは七字乃句或ハおれ句を添へてしるえみ五七と上句五七と下る
あるもいへさて七こハあつくのうこふかなるよりましと
云きこの大宮人乃ふせんとうし大宮人乃踏ところ所を波のよりう
さしへうせすなるまもいへん物をと人乃あとをとむる居宅堂社なとも
そらのあれてのこり
1268
歎くの緑あるとも心を云り
こらかてをまきむく

1268

柿本朝臣人麻呂

兒等手乎　巻向山者　常在常
過往人尓　往巻目八方

こらかてをまきむく山ハ常なれと
すきにし人にゆきまかめやも

こらかてをとこハ巻向
とゆさん訓る是も句山
ハ常盤あるやうなれ
と是も時ふそて常なら

1269

巻向之　山邊響而　往水之
三名沫如　世人吾等者

まきむくの山へとよみてゆく水の
みなわのことしよの人われは

りも云ひてむりよ
なる人ふい所んやと
しゆりかやハ百あやと
なきこくのこへつきて

寄（テ）物（ニ）發（ヲコス）思（ヲ）歌一首　出（ツ）古歌集（ニ）

作者未詳